自然の連続性についての一考察

―― アリストテレス『動物誌』8巻1章を手がかりにして ――

中　村　公　博

はじめに

「自然は連続的に移り行く」ことは，アリストテレスの生物学の根本原則のうちのひとつである。後世「自然の階梯」(scala naturae) と呼ばれることとなったこの原則を，アリストテレス自身の言葉から直接に引用するなら，以下のとおりである。

〔1〕「自然は無生物から動物に至るまで少しずつ移り行く (μετα–βαίνει) ので，この連続性によって，それらの境界上にあるもの，中間のものがそれらのいずれに属するか分からない。」(*HA*. Θ1.588b4–6) (1)

---

(1) 引用記号『動物誌』*HA*.『動物部分論』*PA*.『政治学』*Pol*.『形而上学』*Met*.『自然学』*Ph*.

テキスト『動物誌』はD.M.Balmeによる新テキスト (*Aristotle Historia Animalium volume I*, 2002, Cambridge) に拠るが，註釈が未公刊のため，特に8巻についてはLoeb版 (*Aristotle History of Animals I –X,* 1991) のBalmeによる序論と註釈を参照している (ただし，Balmeは8巻を7巻として扱うことを提案しているが，本稿では伝統的な区切りに従う)。『動物部分論』はA. L. PeckによるLoeb版 (*Aristotle Parts of Animals*, 1955)，その他はOxford Classical Textsに拠る。

〔2〕「自然は，無生物から，生物ではあるが動物ではないもの（植物）を経て，動物に至るまで，連続的に（συνεχῶς）移り行くのであり，それは，一方が他方と，お互いに近接しているがゆえに，ほんのわずかしか異ならないように思えるほどである。」（*PA*. Δ5.681a13–15）

以上〔1〕〔2〕より，この原則が意味するところをさしあたって一言で言えば，この自然界にあるものども，つまり，無生物，植物，動物，人間の間の違いが分かりにくいと言えるほどに，お互いが非常に近接しているということである。仮にこれを「自然の連続性」と呼ぶとすると，この自然の連続性という概念は，アリストテレスの哲学において重要な役割を果たしていると私は考える。そこで本稿では，まず，アリストテレスの動物論著作群の中で〔1〕が語られている『動物誌』8巻1章を集中的に分析する。それに関連して，〔2〕が語られている『動物部分論』4巻5章にも言及することになろう。これを通して，自然の連続性が何を意味し，そしてこれをめぐってアリストテレスが何を考えたかを考察したい。

Ⅰ　諸生物間の類似 ――『動物誌』8巻1章前半

『動物誌』8巻1章冒頭でアリストテレスは，7巻までが諸動物を形成する諸部分の本性と生殖発生に関する事実の指摘であったのに対し，8巻以降は諸動物の「行動と生活が，性格（ἦθος）と食物・栄養（τροφή）に応じて異なる」（*HA*. Θ1.588a17–19）こと，つまり諸動物の生態の差異を対象とすることを宣言している。これより，この1章はいわば動物生態論の総論に相当するとみなすことができる。この総論において注目すべきは，人間と動物の生態の差異を見出す前に，その類似を指摘することから始めているということである。たとえば「馴致性と野性，穏やかさと気難しさ，勇敢と臆病，怖がりと大胆，熱血と狡猾，さらに思考的な理解力に似たもの」（ibid. a21–24）といった諸性格が人間以外の動物にも見られ，

それらの類似した諸性格を視点にとると，これらを持つ「程度の差に応じた」差異が諸動物に見出される（ibid. a25−26）。さらに，諸性格のうち「技術や知恵や理解力」といった知的能力について，「人間にあるように，動物の或るものには何か別のそのような自然的能力がある」（ibid. a29−31）と指摘される。つまり，人間だけが持つと思われる諸性格ですら，或る動物には見出され，この類似した性格を視点にとると，人間と動物との「対応的な」差異が見出される(2)。

このような性格の類似から差異を見出すという方法は，以下のことを含意している。これらの性格は，「人間において最も明瞭な差異を示す」「魂のあり方を示す痕跡」と呼ばれる（ibid. a19−21）。つまり，諸性格の差異は人間において最も明瞭に観察されるのであり，これを視点にとってはじめて，人間とそれ以外の動物との差異が観察できるということである(3)。だから，諸性格の「程度の差」は，常に人間に多く他の動物には少ないという形になるとは限らない。たとえば「勇敢」は人間よりライオンの方が多いと見なせるように，性格によっては，人間よりも動物に多いという仕方で異なる（ibid. a27−28）。一方，「対応的に」ということも，人間だけが思考を持ち動物は持たないという形で考えられておらず，たとえばツバメの造巣行動には「人間の生の模倣」（ibid. I7. 612b18 −

(2)　「程度の差に応じて」「対応的に」のいずれも，『動物誌』1巻1章中の記述（*HA*. A1.486a21−b21 cf. *PA*. A4. 644a17−25, b10−16）においては動物間の部分の差異について使われていた。「程度の差に応じて」とは，たとえば鳥類の場合，羽の多い種と少ない種があるというように，同じ類の動物の間で，同じ部分を持つ場合，その性質が過不足の関係にある形で異なる仕方であり，「対応的に」とは，たとえば鳥類と魚類の場合，鳥類の羽に対応する働きをするのは魚類の鱗であるというように，異なる類の動物の間で，同じ部分を持たない場合，似た働きを持つ部分が異なる仕方である。両者ともに，同書8巻1章においては，人間と動物との間の諸性格の差異へと転用されていることになる。

19）とすら表現できるような技術や知恵が認められるように，或る動物は人間の理性的思考に対応する性格を持ち，逆に人間は幼児期を見れば分かるように，動物の獣性と対応する性格を持つ（ibid. Θ1.588a33−b2）という仕方で異なるのである。

以上のような形で，「程度の差に応じて」にせよ「対応的」にせよ，人間の生態を視点にして，これとの類似から諸動物の生態の違いを分析するというアリストテレスの方法が，〔1〕の記述において，「自然が連続的に移り行く」こと，つまり無生物から人間までの連続性（τῇ συνεχείᾳ ibid. 588b5, συνεχής b11）を導出したと言えよう。その連続性は，まず第一に人間の持つ諸性格と諸動物の性格の類似として我々に現れるのであるが，これを手がかりにアリストテレスは，無生物と生物の境界上にあるものの存在を指摘することによって，類似の範囲を動物から植物へ拡大する。つまり一般的に植物は，無生物と比較すれば生物のように見えるが，動物と比較すれば無生物のように見える（ibid. b9–10），あるいは海中の生物には動物なのか植物なのか迷うものがある（ibid. b12–13）。これにより，当初人間と動物の間での類似として見出された連続性が，今度は無生物と植物，植物と動物の間の境界を曖昧にさせる類似として見出され，植物，無生物にまで連結される。

では，そのような類似とはいかなるものであるか。アリストテレスは

---

(3) このような発想があったからこそ，アリストテレスは『動物誌』において「人間が諸動物のうちで我々にとって最も可知的であるのは必然である」（*HA.* A6. 491a22−23）という理由で，人体の諸部分から探究を始める方法をとることができた。つまり，ちょうど貨幣の真贋を調べる時に誰でも自分が最もよく知っている貨幣と比較せざるをえないように（ibid. a20−22），人間が未知の諸動物を観察するためには，自らにとって最も分かりやすい人体の諸部分の観察から始めざるをえない。諸動物の働きについてもこれと同様であり，人間においてより明確に現れている働きを観察してはじめて，諸動物の働きの類似も差異もよく分かることになる（ibid. I1.608b4−8）。

海中の生物を証拠にしてそれを説明しようとしている。海中の生物は（1）他のものに固着していて，遊離すると死んでしまうことより，一般的に貝類は，移動性の動物に比べれば，植物に類似している（ibid. b13−17）。（2）感覚を持つ証拠（肉的な性質）を何も見せないか，あるいは見せるとしてもぼんやりとしか見せないことより，たとえばカイメンのように植物に全く類似しているように見える（ibid. b17−21）。つまり，（1）遊離の可否，（2）感覚の有無の二つが動物と植物を区分する指標となっており，海中の生物は，この指標によって明確に区別できないから，動物なのか植物なのか迷うと言われるのである。

しかしその一方で，アリストテレスは，同書1巻1章ではすでに，海中の生物を明確に動物だと見なしており（*HA*. A1. 487b6−18），植物に全く類似しているはずのカイメンですら，感覚を示すという理由で明確に動物に分類している（ibid. 487b9−10, cf. E16. 548b10−12[(4)]）。ということは，『動物誌』におけるアリストテレスは，海中の生物は動物なのか植物なのか区別できないとは言いながら，その一方で，これらは植物ではなく動物であると明確に区別できると考えていることになる。ということは，アリストテレスが同書8巻1章において〔1〕の形で語った自然の連続性は，いわば単なる見かけに過ぎないということになるのであろうか。つまり，動物と植物の境界は本当は明確なのだが，見かけの上で曖昧であるから，類似しているように見えるに過ぎないということなのだろうか。

これに答えるためには，上記において証拠とされている海中の生物についてのアリストテレスの観察をさらに分析する必要がある。なぜなら，これらの生物が取り扱われる『動物部分論』4巻5章においても，「自然は連続的に移り行く」ことを含む〔2〕が現れ，自然の連続性が，より具

---

(4)　いずれの箇所においても，はがそうとすると，これを感じて，身を縮めるため，はがしにくくなるということがカイメンが感覚を持つことの証拠とされている。

体的な形で言及されているからである。

Ⅱ　動物と植物の類似と差異 ――『動物部分論』4巻5章

まず，『動物部分論』4巻5章において，〔2〕が現れるコンテキストを見ておこう。この章は，4章までの有血動物（人類，胎生四足類，卵生四足類，鳥類，魚類[5]）の記述に続いて，無血動物（軟体類，軟殻類，殻皮類，有節類）について記述している部分である。無血動物とは，内臓も，それを構成する血液も持たないことを本質とする（*PA*. Δ5.678a32−34）。ならば，もはや動物とは言えないのではないかと考えられよう。しかし，アリストテレスによれば「これらにとっては（有血動物の）心臓に対応的な部分（τὸ ἀνάλογον τῇ καρδίᾳ）を持つことがただ必須である」（ibid. b2−3）ため，動物とされる。この「対応的」ということは，すでに『動物誌』でも使われていたように，異なる類の動物の間で，似た働きを持つ部分を探す視点である。つまり，内臓も血液も持たない生物であれば，有血動物のようにはっきりとした形で心臓を持たないため，心臓がどこにどのようにあるか我々には明確には分からないのが普通であろう。しかし，アリストテレスは，これらの生物も，有血動物の心臓に対応的な部分を持っているはずだと言っていることになる。なぜそう言えるのであろうか。それは，これらの生物が無血であっても感覚するからに他ならない。アリストテレスは直後にこう言う。「なぜなら，魂の感覚的部分と生命の原理は，諸部分と身体の何らかの起源（心臓）の中で，すべての動物に帰属するから」（ibid. b3−4）と。同書3巻4章においては，動物は感覚によって定義され，最初に血液を含む起源的部分である心臓が最初に感覚しうるものである（ibid. Γ4.666a34−b1）と規定されているから，ここで示された血液・心臓・感覚の三つのうち，血液がないのならば，

---

(5)　以下，このような生物学的呼称は，『動物誌』は岩波文庫版（1998），『動物部分論』は岩波『アリストテレス全集』版（1969）の島崎三郎訳に準拠する。

有血動物と同じ心臓は持たないが，感覚があるのならば，少なくとも有血動物の心臓に対応する部分があるはずだという論理になる。ゆえに，前節で言及された動物と植物を区分する指標（1）遊離の可否（2）感覚の有無のうち，（2）は『動物部分論』において無血動物を規定するという文脈の中で明確化され説明されているのである。

以上の無血動物についての規定を踏まえて，アリストテレスはそれに含まれる殻皮類のホヤとカイメンの具体的分析に進む。そこではまず，ホヤとカイメンは，両者とも植物とほとんど変わらないと言えるが，カイメンは完全に植物の能力を持つから，ホヤの方がカイメンと比べて「より動物的（ζωτικώτερα）」であるとされる（ibid. Δ5.681a10−13）。このように，植物→カイメン→ホヤの順で「より動物的」という比較級で語られる理由として，自然の連続性を指摘する〔2〕が現れているのである。しかも，それに続くアリストテレスの観察（ibid. Δ5.681a15−36）においては，上述の指標（1）遊離の可否（2）感覚の有無が使用されているので，これを分析すれば，自然の連続性もさらに明確に理解できると期待される。

カイメンが植物と変わらないと言われる理由は，たとえばナマコやクラゲが遊離できるのに対し，カイメンは常に何かに固着し，遊離すれば死んでしまうことにある。この限りでは，（1）遊離の可否が，動物と植物を区分する指標となっているかのようである。ところがアリストテレスは，地上の植物の中にも，遊離できるようなものがいくつかある(6)とも言う。つまり，動物であっても遊離できないものがあり，植物であっても遊離できるものがあるのだから，（1）遊離の可否は動物と植物を区別する確実な指標になっていない。

一方，カイメンに比べて，ホヤは「より動物的」だと言われる。遊離

(6)　例として「イワレンゲ」が木釘にかけておいても，長い間生きていることが挙げられている。

できないことでは，カイメンと同じであり，しかも，はっきりした排泄物がないために，もっとも「植物的（φυτικός）」と呼ぶのが正しいとすら言われている。ここまでは植物と変わらない。しかし，何か肉質の部分を持つため，何らかの感覚を持っているように思われるということにおいては，動物的だと言える。ゆえに，ここでは（2）感覚の有無が動物と植物を区分する指標となっている。しかもホヤの中央部に通る薄い隔膜に「生命の主座」があるというのが正しいとまで語られているから，ホヤについてアリストテレスは，感覚の存在から，（2）よりこれを動物と考え(7)，心臓に対応的なものを見出そうとしているのである。

以上の観察を通じて言えることは，動物と植物を明確に区分する指標として，（1）遊離の可否は機能していないが，（2）感覚の有無は，その起源である心臓に対応するものの有無も含めて機能し，さらに（3）排泄物の有無が付け加えられているということである。これをさらに明確化しようとして，アリストテレスは，ホヤに続けて，殻皮類ではないのにもかかわらず，植物にも動物にもまたがる生物としてイソギンチャクにあえて言及している（ibid. a36−b8）。それによると，イソギンチャクは，遊離し，えさへと向かって行ったり，向かってくるものを感じることにおいて動物的である一方，体のざらざらしていることを利用して身を保全し，岩にすぐ付着し，明確な排泄物がないが口はあるということにおいて植物に近いと言われる。以上を3つの指標を使って整理してみよう。

「動物的」：（1）遊離し，
（2）感覚し，その起源となる心臓に対応するものがあり，

---

(7) 感覚はいかなる動物にも備わっており，とくに，味覚をその一部とする触覚を欠く動物はいないということは，『動物誌』4巻8章においても詳しく述べられている。したがって，肉質の部分は触覚のために最低限必要な組成である。

(3) 栄養摂取し，明確な排泄物がある。

「植物的」：　(1) 遊離できず固着し，

(2) 感覚せず，心臓に対応するものすらない

(3) 栄養摂取だけをし，排泄物がない。

これらのうち，まず (1) は決定的ではない。カイメンなどのように遊離できない動物もいるし，植物に遊離するものがあるからである。しかし (2) は決定的である。カイメンもホヤも，遊離できずとも感覚することによって動物とされ，ホヤにいたっては心臓に対応するものまで指摘される。これによって (3) も決定的となろう。栄養摂取は動物と植物にも共通だが，明確な排泄物があるかないか[8]，という形でその仕方が明確に区別されるのである[9]。

以上より，自然の連続性は，単なる見かけに過ぎないのではなく，むしろ動物と植物を区別する指標を明確化させた結果であるということになる。つまり自然の連続性は，動物と植物の本質に関わる生態における類似と差異を共に含んでいる。たしかに固着するか遊離するかということにおいては両者は類似しており，明らかな差異を持つのではない。しかし，感覚（と，その起源としての心臓）があるかないかということにおいては類似せず，両者は明らかな差異を持つと言えるのである。

ここで論点をまとめよう。『動物誌』8巻1章前半においては，当初人

---

(8)　「植物の何ものも排泄物を持たない。」(*PA*. Δ5.681a33−34)

(9)　「栄養に関わる部分は，すべて（の無血動物）に帰属しなければならず，上述のようなあり方をしているのであるが，一方，明らかに(それら無血動物は)，有血動物に帰属するもののうちで，感覚の主座（＝心臓）に即して対応的な何らかの部分を持つべきである。その部分はいかなる動物にあるべきものだからである。」(*PA*. Δ5.681b13−17) なお，これに続けて，この心臓に対応的な部分は他の無血動物（軟体類，軟殻類）では「ミュティス」と呼ばれる部分であると指摘されている。

間と動物の間での類似として見出された連続性が，無生物と植物，植物と動物の間の境界を曖昧にさせる類似として見出され，植物，無生物にまで連結されていた。しかし，動物と植物の間の連続性は，『動物部分論』4巻5章より，遊離の可否における類似と，感覚の有無による差異を含意することが明らかになった。そこで，以上の成果を『動物誌』8巻1章のコンテキストに改めて置き直してみるとき，自然の連続性についてさらに何が明らかになるであろうか。

Ⅲ　諸生物の類似と差異 ――『動物誌』8巻1章後半

『動物誌』8巻1章前半において，アリストテレスは，人間から動物を経て植物の方へ，自然の連続性をいわば「上から」移り行くように，類似を見出していたが，その結果1章後半において彼が見出したことを一言で言えば，すくなくとも人間から植物までにおいては，生殖が自然の連続性の実在的根拠になるということである。つまり，植物のなすことには「自分に似たような他のものを再生産する」生殖以外には何もなく，動物にも生殖以外には何もしないものがあるという理由で（*HA*. Θ1.588b24−27），生殖は，無生物と植物の差異の根拠であると同時に，植物以上のすべて生物に「共通」（κοινωὶ ibid.b28）であると語られる。この共通性は，前節における『動物部分論』4巻5章においては，栄養摂取として現れていた。ゆえに，栄養摂取と生殖は，共に自然の連続性の基礎に位置していることになる。

しかし，それは直ちに次のような疑問を呼び起こす。諸生物のうちで生殖・栄養摂取が共通しているというだけであれば，諸生物におけるそれがすべて同じであるということになりかねない。もし同じであるならば，諸生物間の違いを説明したことにならない。つまり，共通性と連続性とは異なるのではないか。

これをアリストテレスは十分に意識しており，上記のように「上から」の類似から見出した生殖の共通性があたかも転回点となるように，今度

はいわば「下から」の差異について語ろうとする。この「下から」の差異は，「より生命を分有していると思われることにより」(ibid. b8) とか，「生命と動きをより持っている」(ibid. b22−23) と，比較の表現で語られるように，動物も植物と共通して生殖するが，その仕方は植物とは異なるということである。或る動物は植物のように季節ごとに単純に生殖し，或る動物は子を産みたての頃は一生懸命えさを集めるが，子が成長すると離れ，また或る動物はもっと長い間共同体の中で「ポリス的に⑽」養育する（ibid. 588b30−589a2)。つまり動物も生殖を持つが，その生殖は植物と同じではなく，養育まで生活の一部として伴う生殖となる（ibid. 589a2−4)。それは生殖に加えて感覚を持ち（ibid. 588b28)，加えて記憶も持つから（ibid. 589a1) であり，こうした差異が動物の生殖と生活様態を変えることになる。

したがって，自然の連続性は諸生物の生殖の共通性を基礎とするが，それが同じであることを意味するのではない。むしろ，生殖の共通性があるからこそ，生殖の仕方の差異がより明瞭に説明されるのである。「自分に似たような他のものを再生産する」ことだけをとってみれば，生殖は，植物にも動物にも人間にも共通である。しかし，動物は感覚することによって植物と異なる仕方で生殖し，さらに，動物によっては，人間の思考に類似する性格を持つことによって生殖の仕方がまた異なる。そして人間は思考を持つことによりより高度な生殖を行う。

以上より，自然の連続性について我々が知りえたことは以下のようにまとめられよう。これは我々にとって，まずは人間と動物の類似として，次に，動物と植物の間の境界を曖昧にさせる類似として現れ，人間から植物までを連結する。しかし，動物と植物の連続性は，遊離の可否における類似と感覚の有無による差異を含意すると同時に，生殖と栄養摂取をその基礎とする。かくして，栄養摂取・生殖だけをする生物は植物で

⑽　この言葉の意味については，次節で検討される。

あり，感覚しつつ栄養摂取・生殖をする生物が動物であり，思考しつつ感覚しつつ栄養摂取・生殖をする生物が人間である。ところが，植物，動物，人間それぞれが示す栄養摂取と生殖の仕方は，感覚と思考によって規定されるため異なる。アリストテレスが「生命と動きをより持つ」(*HA*. Θ1.588b22−23) という量的増大をイメージさせる表現を使ったとき，そこに込められていたのは，自然の連続性の以上のような内容であったと考えられる。

Ⅳ　政治学＝実践学における自然の連続性 ――『政治学』1巻1，2章

以上のように理解された自然の連続性は，さらに広いコンテキストに置き直してみれば，アリストテレスの自然観と彼の哲学的考察との関係の中でより明確になることが分かる。

たとえば『政治学』1巻1，2章を見てみよう。ここで「人間は自然的にポリス的動物である」(*Pol*. A2. 1253a2−3) と語られるとき，自然は人間に対して，植物・動物と共通の生殖から，家，その集まりとしての村，そしてポリスという共同体を生む駆動力のように記述されている。この駆動力こそ，生物に「内在する動きの原理・原因」(*Ph*. B1. 192b21) という「自然」の規定の意味するところである(11)。動きとは，「可能態にある

(11)　このような自然観は，アリストテレスの理論学をも動機付けている。『形而上学』1巻1，2章において「人間は知ることを自然的に欲する」(*Met*. A1. 980a21) と語られるとき，自然は人間に対して，動物と共通の感覚から，記憶，その集積としての経験，それについての普遍判断たる技術を経て，原理・原因についての「知恵」(学的認識) を生む駆動力のように記述されている。つまり，人間は，そうした自然が内在する限り，必然的に普遍的原理・原因を知るように動機付けられているということである。そのように「知る」ことはもはや効用のためではなく，知るために知るという自己目的の形になる。ここに，理論学が実践学と決定的に異なるゆえんがある。

ものの可能態にある限りでの現実態」(ibid. Γ1. 201a10−11) であるから，場所的移動にせよ，性質変化にせよ，量的増大にせよ，そして生成成長にせよ，その動きが，始まりから終わりに向かいつつあるが，まだ終わりに達していない状態である。

そのように動いている生物を観察する時に，アリストテレスがその視点にとるのは人間である。つまり，『政治学』冒頭において，生殖・栄養摂取，感覚，思考のそれぞれの働きが人間において他の生物と比べてより発揮され，より明確に現れているという考え方を読み取ることができる。自然は，生物の生まれからその死まで一貫して成長衰退の動きを司り，生物の能力が最も発揮されるときに我々に現れると考えられるからである（*Pol.* A1. 1252b32−34)。

このことを象徴すると思われるのが，『動物誌』8巻1章にも現れている「ポリス的（πολιτικός)」という言葉である。なぜなら，この「ポリス的」ということは，生殖・栄養摂取，感覚，思考という働きが人間において最も明瞭に発揮されて実現することだからである。この言葉は，『動物誌』1巻1章で動物の生活法あるいは行動の相違が語られる文脈においてすでに現れている。動物には群集性のものと単独性のものがあり，群集性の動物の中に「ポリス的」とそうでないものがある。「ポリス的」である基準とは「全員のなす仕事が，ある一つの共通なものになる」(*HA.* A1. 488a8) ことであり，それには人間だけでなく，ミツバチ，ツル，アリが含まれる。ここで「ポリス的」とは，人間に限定されず，群集した上でなす仕事が共通である動物について使われているが，同書巻1章に至ると，「よりポリス的」という比較級で語られる（πολιτικώτερον ibid. Θ1. 589a2)。これは単に比喩で語られているのではない。すでに前節で論じたように，単なる生殖に加え，感覚や記憶を加え持った動物が，共同体の中で子を養育することまで伴うような生殖を生活の一部として行うことを示している。このことは『政治学』1巻2章においても人間が他の群集性の動物よりも「よりポリス的」とされる（*Pol.* A2. 1253a7−9) ことに

おいてさらに明確になる[12]。つまり，動物が共通して持つ声に加え，言葉を持った人間だけが，正邪や利害を思考判断する（ibid. a9–18）という，人間の「よりポリス的な」形態をみれば，人間以外の動物の「ポリス的」形態も明確に観察できるのである。

したがって，アリストテレスが『政治学』で強く主張している，事柄を最小単位から，その成長を発生から考察する方法（*Pol*. A1. 1252a18－26）とは，単にいわば「下から」積み上げていくというような単純な作業ではないことがわかる。アリストテレスは，人間の造るポリスこそが，「最も本来的な」（κυριωτάτη ibid. a5）共同体だと言う。それは単純に他の共同体より高度だというのではなく，「諸共同体を包括する」（ibid. a5−6）と言われるように，ポリスには，他の共同体の持つ要素がその内に含まれる形で明確に実現されている。したがって，ポリスが解明されれば，その他の共同体も解明されるということになる。このようにいわば「下から」の考察と「上から」の考察が，相補的な関係のもとに，並存しているのである。その「上から」の考察を象徴する言葉が「最も本来的な」であり，対象の本来的なあり方が，言葉の本来的な使われ方を決めると同時に，それを基準にして，対象の派生的なあり方と言葉の使われ方を整理・分析する方法[13]を可能にするものである。そのように考えるのでな

⑿　「ポリス的」における『動物誌』と『政治学』との関わりについては，W. Kullmann ‘Man as a Political Animal in Aristotle’ *A Companion to Aristotle's Politics,* ed. Keyt-Miller Jr.(1991) pp.95−117の指摘（特にp.105以降）に負う。

⒀　この方法は，『形而上学』における実体の探求においても使われる。たとえば様々な物事について「健康的」と語られるが，それらはすべて或る一つの「健康」との関係で語られるように，言葉には或る一つの本来的な使われ方があり，残りはそこから派生的に使われる（*Met*. Γ2. 1003a34−b4）。これより，「ある」という言葉においてもそれが本来的に使われるのは，実体についてである。

ければ，ハチなどの生活について「ポリス的」と語ることは不可能であるか，単なる比喩にとどまるであろう。アリストテレスは，「ポリス的」ということの本来のあり方を人間に見出し，「ポリス的」という言葉の本来の使われ方を規定し，これを基準にして，人間以外の動物における「ポリス的」というあり方を見出し，これについて「ポリス的」という言葉を派生的に語るのである。

このように，アリストテレスが動物の観察を通じて発見した自然の連続性は，人間に関わる政治学＝実践学においてより明らかになると同時に，対象のより本来的なあり方を求め，派生的なあり方を整理するというアリストテレス独自の探求法をも可能にしたと言える。

おわりに

以上より，「自然が連続的に移り行く」という自然の連続性は，諸生物間の類似と差異を柔軟に説明するための概念装置であると評価できる。つまり，現実問題として，我々が動物や植物の生態を観察するとき，お互いに類似したり，見かけの上で区別できない局面が多い。アリストテレスはそのような局面をいわば逆手にとって，諸生物間の類似を生殖の共通性によって説明し，その上で，植物と動物と人間では，感覚と思考によって生殖のあり方が異なることを理論的に説明しようとした⑭。そしてこのような自然の連続性は，動物観察の成果であると同時に，実践学におけるポリスの分析を射程に入れるものであったと言えよう⑮。

---

⑭　これは，『自然学』1巻1章に述べられているような，本性上不明晰ではあるが我々にとってより可知的なものから，本性上明晰なもの，ロゴスにしたがってより可知的なものが生じるというアリストテレスの経験主義的方法の一例であると言えよう。

⑮　自然の連続性を『動物誌』『動物部分論』に基づいて検討したものに，G. E. R. Lloyd, *Aristotelian Explorations,* Cambridge, 1996, chap.3. ‘Fuzzy natures?’ がある。それによれば，アリストテレスが，感覚の有無を動物と植物の区分

の原理として厳格に運用することに終始しておらず，むしろその区分の適用にためらい（hesitation）を隠さないのは，区分しがたいものを柔軟に認めているためであるという。しかし，本稿が，『政治学』も含めたより広い文脈において自然の連続性を検討しようとしたのは，それはLloydの言うようなアリストテレスの科学者としての態度の問題というよりむしろ，アリストテレスが生物学的観察を行うときには，そこにはすでに同時並行的に彼の哲学的考察が連動していることを示したかったからである。